

「この土台はだいじょうぶ」

ルカによる福音書

第6章 46節～49節

説教

岡村 恒 牧師

「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人」(48節)という、聖書の中でもとても有名なたとえ話しを読んでいます。主イエスは、世の終わりに滅びることなく、救われる人の話をなさいました。

今から500年前、この話が新しく聞かれるようになりました。人はいったい何によって救われるのか、という一番大切な問いの答えが再発見されたからです。宗教改革者マルティン・ルターは、聖書を繰り返し読み、主イエスの言葉を新しく聞きなおしました。ただ主イエスを信じる信仰だけが人を救う。この救いの核心が、あれから500年たった今も、私たちの信仰を支え、礼拝を支えています。

宗教改革は礼拝改革とも呼ばれます。礼拝堂の姿も、神様に祈る礼拝の形もすっかり新しくなりました。教会という家の土台と柱とが、宗教改革によって確認されたからです。

主イエスはこの日、「わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それをを行う人」(46節)と、「わたしの」という言葉を強調してお語りになりました。主イエスとずっと一緒にいた弟子たちは、主イエスの言葉を行うことに失敗しました。主イエスの言葉にだけ、全身全霊をかけて信頼し通すことはできませんでした。

主イエスは、家を建てる人の話をして、私たちの本当の姿を描き出されました。家の形や建て方ではなく、家の土台が最も重要だと言われたのは、多くの人が、何を土台にしたら良いか分からないからです。主イエスに敵対していた人々は、りっぱな豪邸を建てつつもっていました。権威や名誉、財産を積み上げて、安心できると思い込んでいたのです。しかし結局、「土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」(49節)ということになってしまうのです。

この大阪教会聖堂は、かつて海であった砂地の上に建っています。阪神・淡路大震災の時には地盤が液状化を起こして建物全体が沈下して大きな被害を受けました。たとえ、人間の知恵と力を尽くしてしっかりとした土台を据えて建てても、人間が作るものはやがて崩れ去ります。そして、神がお造りになったこの世界全体も、終わりの日には崩れ落ちます。何一つ残るものはありません。

しかし聖書は、その終わりの日に、倒れることのない家を建てることのできる土台があると言うのです。建て方や家の形ではなく、土台が肝心なのです。宗教改革はこの土台を再発見した出来事でした。ただ神の約束の言葉だけが、世の終わりが来ても変わることがない本当の土台だということが、確信をもって語られました。

教会で、そして家庭で、信仰が手渡しされ、祈りが口移しで伝えられていく中で、ひとりひとりが本当の土台の上に建てられていきます。目に見えるものや、手で触れることができるものではなく、裁きの日にも揺らぐことのない土台が、私たちには備えられているのです。

今日では、目に見えないところを調べる方法がいろいろあります。実は、人生の土台についても、それを知る手段があります。聖書です。人生の土台を知る地図が、ここにあります。人生全体、命のすべてをその上に載せてしまっても良い確かな土台が聖書の中に記されています。

主イエスのことを『主よ、主よ』と呼びながら、他の場所に土台をを据えて滅びていこうとする人々を前にして、主イエスは、確かな人生の土台の上へと私たちを招いて下さいます。

宗教改革のことを英語ではReformationと呼びます。余分な飾りや無駄なものを取り除いて、本当に大事な土台と柱を残して、家全体を新しくする話です。大阪教会の聖堂正面には祭壇も十字架もありません。建築当初、屋根や塔の上にも十字架はありませんでした。これは、「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。」(ヨハネによる福音書 6章63節)という宗教改革者ツヴィングリーらの信仰が具体的に表されているものです。目に見えない神の言葉に集中するために、床の傾斜やベンチのカーブ、音響や採光もよく考えられています。私たちの救いにとって無くてならないものはただ神の言葉だけだ、という信仰を私たちも受けついでいます。

主イエスを信じて生きる人生に間違いありません。神の約束の言葉に、全体重をかけて生きるなら、たとえ何があっても、その人の人生は倒れないのです。これは確かな約束です。聖書の言葉を信じ、イエス・キリストを信じて、この確かな土台の上に人生を立てて頂いて生きてから良いのです。

(記 岡村 恒)